加納伊都後援会 TRAUBEN ニュースレター

STRUM
シュトゥルム

第 38 号
平成 30 年 1 月 14 日発行

年明けから早くも２週間が過ぎましたが、皆様、本年もどうぞよろしくお願いいたします。
さて 12 月には、第 15 回となり節目の年をまた迎えられた、恒例のリサイタルを無事に終えることができました。15 年間、聴いてくださるお客様に、感動していただくだけの内容を届け続けることは、至難の業ではないかと思います。ほんわかキャラの伊都さんに潜む強い決意を、またまた感じたコンサートでした。

近況報告

15 回目のリサイタルが無事終えられましたこと、心より御礼申し上げます。昨年は音楽を演奏することについて、今一度考えさせられる一年となり、リサイタルでも自分なりの演奏に対する思いを込めつつ、あらためて音楽を奏でることの喜びを感じました。

やはり長い海外生活から帰国した友人と、思いがけないところで海外生活ホームシックにかかっているという話で盛り上がるのですが、私の場合は昨年半ばより発症した、ポテトとチーズが食べたい病のようで、確かにウィーン時代よりこの方毎日のように食していたじゃがいもとチーズをこちらではあまり食べる機会がなく、美味しいからというよりどうやら体が欲しているらしく、いまだ止む気配もなく、今年はポテトとチーズを追い求めつつ、そして音楽が携わることのできる可能性を模索していけたらと思っています。

しばらくプライベートなパフォーマンスが続き、次回のソロライブは 3 月末、人の声に一番近いヴァイオリンの音を今年も心をこめて丁寧に奏でていきたく精進します。

【伊都】

第 15 回加納伊都ヴァイオリンリサイタル

12 月 22 日、華やかにクリスマスを待つ横浜みなとみらいで恒例のリサイタルが始まりました。ピアニストは 6 年前、第 9 回リサイタルの時にも共演した村上明子さんです。

前半は、この曲をこんな風に弾けるのは伊都さんだけ…と思われるクライスラー：美しきロスマリンから、モーツァルトにはめずらしい、でも美しい旋律の短調のヴァイオリンソナタに、そして 3 楽章からなるベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第 8 番へと続きました。この曲が作られたウィーンのハイリゲンシュタットは伊都さんが留学したばかりの頃の下宿があったエリアだとか。ベートーヴェンの家の前や散歩道を歩き、ご近所さんとの温かい交流など、多くの思い出がこの曲を弾くとよみがえるとのこと、それらが皆、演奏の奥行きの深さとなっているのでしょう。

後半、シマノフスキー：神話から「アレトゥサの泉」「ナルシス」は美しく独特な世界観を持つ曲。「ミステリアスでドラマティックだけれどどこか人間臭い、神話の世界を表現できたらと思っています。」と伊都さんが書いているように、神秘的で抒情的な旋律が彼女の表現力で、まるで登場人物が見えるかのように生き生きと奏でられました。チャイコフスキー：なつかしい土地の思い出「瞑想曲」では、やはり、伊都さんがハバロフスクを訪れ、ロシアの広大な土地と厳しい自然を肌で感じた体験が活きています。最後の、サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソは、耳慣れた主題が少し切なくも華やかな、心躍るあの曲です。「きらきらと紙ふぶきが舞うように…」という伊都さんの表現通りに、クリスマスにふさわしいフィナーレとなりました。

音・色・言葉　…すでに予感　音と色と言葉のコラボレーション

10 月 27 日、横浜日ノ出町にあるライブハウス「シャノアール」でヴァイオリンと詩とアートのコラボレーションライブが行われました。フランス語で「黒猫」という店名が似合う、黒を基調とした、妖しい雰囲気漂う店内、伊都さんの演奏するバッハのシャコンヌやドビュッシーに合わせて、詩人の八潮れんさんの詩が朗読されました。背景に鮮やかに浮かび上がるアートは日本画家、神 彌佐子さんの作品。何枚もの黒い喪服の着物に和紙等、様々な素材をコラージュしてあります。
また、フランス文学研究者の宇野邦一さんが、作家カフカについてお話をされるなど、芸術の秋を感じる趣向を凝らしたライブでした。詩や文学は素晴らしい芸術であることは確かですが、時として難解である場合は聴く者の感性は閉ざされます。その点伊都さんのヴァイオリンはダイレクトに聴衆すべての心に伝わり、沁み込む…彼女の音楽に多くの人々が癒され救われていることを実感した夜でした。

Ito＝Solo　Vol.3（仮）

2018 年 3 月 28 日（水）Start 7:30pm
at　横浜エアジン（横浜馬車道）

2018 年はバッハ、ヘンデル、スカルラッティのバロック三大巨匠がそろって生誕 333 年（1685 年生まれ）を迎えるとのことで、それにちなんだプログラムになるそうです。エアジンのマスターは桐朋の大先輩で、ジャズのルーツはバッハ…と話される方でしたね。
詳細が決まり次第、ホームページにご案内を掲載します。

メールマガジンのご登録はこちらから　http://itokanoh.com/form_mm/mm.html

DVD Classic Collection

作品 No.31　「戦場のアリア」
実話に基づく感動の戦場ドラマ
2005 年 フランス、ドイツ、イギリス合作

あらすじ
1914 年クリスマスイブ、第一次世界大戦下のフランス北部の村では、フランス・スコットランド連合軍とドイツ軍が、わずかな距離の塹壕の中で対峙していた。ドイツ軍の塹壕の中には徴兵されたテノール歌手のニコラスと、夫を慕って皇帝の許可証を取り、追いかけてきた妻のソプラノ歌手アナもいた。その夜、敵軍のバグパイプに合わせてニコラスは「聖しこの夜」を歌い始める。

見どころ
敵軍同士が同じ人間同士として、最初は恐る恐る、だんだん心から楽し気に交流する様子がよく描かれている。アナの「アヴェ･マリア」は雪の大地に響き渡り、まさにこれがクリスマスの「奇跡」であることを象徴している。これはフィリップ・ロンビという、この映画音楽の作曲家の作品だが、並みいる多くのクラシック作曲家の「アヴェ・マリア」に引けを取らない美しい曲。素晴らしいソプラノの吹き替えはナタリー・デセイというオペラ歌手。

感想
この出来事の後始末できっちり描かれるところが、ただの美談に終わらない史実を物語っている。その後大戦は激化し、1700 万もの人命を奪う…だからこそ、この日の奇跡の意味が大きいのかもしれない。この時代にまだ残るヨーロッパの騎士道精神を感じるとともに、改めて音楽の力の大きさを感じる作品。伊都さんの最後のアンコール曲も「聖しこの夜」だった。

＊DVD は TSUTAYA の店舗でレンタル可能な作品のみをご紹介しています

編集後記 12 月のリサイタルでは伊都さんのヴァイオリンの音色が、広いホールの一番後ろの席まできれいに響き、感動しました。帰国以来、日本の夏の湿気はヴァイオリンにとって最悪の環境で悲鳴を上げている…と伊都さんに聞きました。でも素人の耳には夏の教会コンサートの音もとても良く聴こえたのですが、今回、「名器グァルネリに似た低めの音が美しいオールドヴァイオリン」との評判通り、体に伝わってくる振動を感じるような響きでした。もちろん彼女の技術や表現力がなせることですが、加えて冬の低い湿度のおかげ？かもしれませんね。ヴァイオリンの故郷クレモナで聴く音はまた違うのでしょうか。あんなに小さな箱からどうやったらあの音が出てくるのか…15 年も聴かせてもらっていてもいつも不思議です。　〈ゆ〉

発行：加納伊都後援会ＴＲＡＵＢＥＮ
〒231-0835 横浜市中区根岸加曽台 15
TEL ：０４５－６２２－６７８０
FAX：０４５－６２１－６４２３
Email：trauben@itokanoh.com
Homepage： itokanoh.com